

ルカ 21・5-19

1 1月も半ばを過ぎ、教会の典礼暦は一般の暦よりも一足早く、来週の日曜日の王であるキリストの主日をもってこの一年のわたしたちの歩みを締めくくろうとしています。

今年の年間主日のミサの中で、わたしたちはルカ福音書に記されたイエスのみことばに耳を傾けてきました。今日のルカ福音書 21 章 5 節から始まるイエスのみことばは、十字架の受難へと向かわれるイエスが公に語られた最後の説教です。今日わたしたちが聴いたのは、そのイエスの最後の説教の初めの部分ですが、この説教が終わるとルカ福音書は 22 章からイエスの受難の出来事を語り始めます。イエスの受難を前にした最後の説教が、この世の終末を告げる内容となっていることには深い意味が込められています。十字架の受難に向かわれるイエスは、後に残される弟子たちが経験することになるであろうあらゆる苦難を見通され、弟子たちがそれらの苦難の中を生き抜いて、イエスの弟子として、それこそが彼らが迎えるべき真の終末である、再臨の人の子イエス・キリストの御前に立つことができるよう励まそうとして、これらのみことばを語り聞かせておられるのです。

今日の福音でイエスは終末について語っておられますが、世の終わりのいわゆる終末の教えは、聖書においてイエスの福音に始めて登場するものではありません。今日の第一朗読で聴いたマラキの預言にあるような、終末における神のさばきを告げることばは、旧約聖書の預言者たちの中に数多く見出すことが出来ます。洗礼者ヨハネがヨルダン川のほとりで宣伝したのも、終末の神の裁きを前に人々に悔い改めを促す説教でした。

今日のマラキの預言には「見よ、その日が来る。炉のように燃える日が。」と告げられていますが、「その日」「主の日」という表現は、終末の神の裁きの時を意味しています。モーツアルトのミサ・レクイエムの中の「ディエス・イレ」の歌詞で一般の人にも知られるようになった、終末における神の裁きに対する信仰は、今もわたしたちの中に生きています。「ディエス・イレ」とは「怒りの日」という意味で、このことばは終末における神のこの世の悪に対する怒りの審判が下される日を意味しています。現代の人々の心を不安に陥れている終末の世の終わりを記述するいわゆる「・・・の予言」の類も、多くの場合、聖書の終末の教えにインスピレーションを得ています。けれども、聖書が語る終末の教えは、それらの書物にあるような、世の終わりに起こる未曾有の天変地異を語ることに主眼があるわけではありません。

聖書が語るいわゆる黙示文学的な終末論は、この世の悪に対する終末における神の決定的な裁きを告げ、この世の悪のもとに苦しみ続ける神に忠実を尽くす者たちへの、神の裁きによる絶対的な救いを語ることによって、この世の悪に苦しむ信仰者たちを励ますことにその意図があるのです。

今日のマラキ預言者のことばをもう一度読み返してみると、「見よ、その日が来る。炉のように燃える日が。」と告げられています。炉のように燃えるその日は終末の神の裁きの日を意味しています。「その日が来ると、高慢な者、悪を行う者はすべてわらのようになる・・・到来するその日は、彼らを燃え上がらせ、根も枝も残さない」。高慢な者、悪を行う者とは、その高慢のゆえに自分たちの力を過信し、この世界の秩序の与え主である神を無視し、自分たちの欲望に従って、神が与えた人間として歩むべき掟の道をわきまえず、神に希望を置かない弱い立場にある人々を不当に苦しめている者たちです。そのような者たちと彼らの仕業の全ては、炉のように燃える神の終末の裁きの日が到来するその日には、炎の中に投げ入れられた藁のように、滅びの火の中で燃やし尽くされると預言者は告げているのです。

しかしそれと同時に、その大いなる破滅の日こそ、神のみ名を畏れ敬う人々にとっては「義の太陽が昇る日」であると預言者は告げています。「義の太陽が昇る日」とは終末の世界の審判者としてのメシア・キリストが来られる日、つまり再臨のキリストを迎える日です。その日には、この世の高慢な支配者たちの不当な圧迫と迫害の中で、神への忠実を守り通してきた人々の上に義の太陽の光が翼のように広げられ、彼らが受けてきた傷の痛みが全て癒される、つまり彼らにとってその日こそ、神の恵みによる救いの日となると預言者は告げていたのです。

最初にも述べたように、今日の福音のみことばをもってイエスはご自分の受難を前にして、旧約の預言者たちの終末の神の裁きについてのメッセージを引き継いで弟子たちを力づけようとしておられるのです。十字架の死を前にして、この世の終わりを思わせるような大きな苦難を経験しなければならない弟子たちを励ます今日の福音のみことばは、わたしたち一人ひとりにも向けられています。「忍耐によって、あなたがたのいのちを勝ち取りなさい」とイエスは言われます。この世の終末の予感に怯える今の時代のわたしたちがなすべき忍耐とは、弟子たちにとってそうであったように、十字架の受難の道を最後まで歩み通されたイエスのもとから決して離れないということです。そのためにも、終末を前にしてどのようなことが起こるか分からない不安に包まれたこの時代にあって、十字架の受難の道に進み行かれるイエスの心を満たしていた、何ごと

にも揺らぐことのない神への信頼をわたしたちの信仰の核として生きる恵みを、願いたいと思います。今のわたしたちを取り巻いている不安にしっかりと目を向けつつ、それらに怯え押しつぶされてしまうことのない、神を信じる者としての生き方を確かなものとする恵みを願い求めたいと思います。

カトリック高円寺教会
主任司祭 吉池好高